

「ニューゲート監獄訪問」再訪問 — 『ボズのスケッチ』におけるロンドンの縮図 —

村上 幸大郎

序

『ボズのスケッチ』(*Sketches by Boz*)は、それまでいくつかの雑誌に掲載された短編やスケッチをまとめた、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の処女作品集である¹。その内容は *Our Parish*, *Scenes*, *Characters*, *Tales* の4つに分類されているが、その中で *Scenes* の最後に収録されている「ニューゲート監獄訪問」(“A Visit to Newgate”)は、他のスケッチとは執筆の経緯が異なる。この作品は『ボズのスケッチ』の第1集が出版される際に新たに書き下ろされたものであり、ディケンズが初めて自分の本の出版を念頭に置いて執筆した作品だと言えよう。また、ディケンズは実際に1835年の11月5日に取材のためにニューゲート監獄を訪れている。この訪問はディケンズに深い印象を与えたようで、キャサリン・ホガース(Catherine Hogarth)への手紙で、“I was intensely interested in everything I saw” (*Letters* 88)と語っており、また訪問中は2時間も口も開かずに監獄の様子を見つめていたという記録も残っている(Willis 113)。こういった資料を考慮しても、この作品は他のスケッチとは一線を画す、入念な取材に基づくものだと言えよう。

このような経緯もあり、「ニューゲート監獄訪問」は他のスケッチに比べると言及されることの多い作品であるが、そのほとんどはディケンズが後に描く小説と関連づけてなされている。確かにニューゲート監獄は『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*)や『大いなる遺産』(*Great Expectations*)などの小説でも描

¹ 『ボズのスケッチ』は1836年2月に第1集が出版された後、それ以降に書かれた作品と、第1集から漏れた作品を収録した第2集が12月に出され、その後それまでのものを1冊にまとめたものが1839年に出版された。この際に4つのセクション分けがなされ、作品の順番も現在と同じものになっているが、ディケンズはその後テキストの訂正を続け、1850年に最終版を刊行している。

かれており、また多くの批評家が指摘するように、このスケッチの最後に描かれる、処刑を控えた死刑囚の描写が『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*)におけるフェイギンの最期を彷彿とさせるものであることは間違いない²。このスケッチを詳細に論じているドウェイン・デヴリーズ(Duane DeVries)も、「ニューゲート監獄訪問」を素晴らしいエッセイであるとしつつも、『ディケンズの徒弟時代』(*Dickens's Apprentice Years*)という彼の本のタイトルが示す通り、若いディケンズが後に小説家として大成する萌芽が見られる作品であると指摘するにとどまっている(DeVries 120)。

しかし、「ニューゲート監獄訪問」が今までのスケッチを一冊の本にまとめる上での締めくくりの作品であることを考えると、この作品とその前後に発表したエッセイとの関連について、もう少し考えてみてもよいように思われる。『ボズのスケッチ』は、語り手のボズが「素人放浪³」(*amateur vagrancy*; DeVries 167)と称してロンドンの町を目的もなく歩き、そこで観察したものをユーモラスに綴った作品集であるが、貧困や病に喘ぐ人々に彼の目が向けられる時、その語りが彼らへの同情に満ちた、ペーソスを感じさせるものになる点もこのスケッチ集における特徴である。そこで本論では、まずは「ニューゲート監獄訪問」について詳しく見た上で、その他のスケッチとの関連について考えてみたい。

I

まずは、ボズがニューゲート監獄を訪問した目的について述べている部分に着目したい。「ニューゲート監獄訪問」は、その執筆の経緯や入念な取材という点の他にも、他のスケッチとは異なる点がある。それは、この作品ではボズが明確な目的を持ってニューゲート監獄に向かっていることである。後年、『無商旅人』(*The Uncommercial Traveller*)の「人目をはばかる界限」(“Shy

² 例えばフレッド・キャプラン(Fred Kaplan)、マイケル・スレイター(Michal Slater)などがこの点について言及している。(Kaplan 65-6, Slater, *Dickens* 56-7)

³ このフレーズはもともと「囚人馬車」(“The Prisoners' Van”)の冒頭にあったものだが、『ボズのスケッチ』第1集に収録された際、この冒頭部分そのものが削除されている。しかし、スレイターはこの言葉が一連のスケッチの全体像を示すものと指摘している(Slater, “Introduction” xvi)。

Neighborhood”)の中で、ディケンズは“My walking is of two kinds; one, straight on end to a definite goal at a round pace; one, objectless, loitering, and purely vagabond.” (UT 119)と書いているが、多くのスケッチが“Walking without any definite object through . . .” (89)、“In our rambles through the streets of London . . .” (236)といった調子で始まることから分かるように、『ボズのスケッチ』のほとんどはこの後者に分類される。しかし、「ニューゲート監獄訪問」では、ボズは“We saw the prison, and saw the prisoners; and what we did see, and that we thought, we will tell at once in our own way.” (200)と簡潔にこのスケッチの目的を語り、話を始めている。このようなルポタージュ的な始まり方はジョン・M・L・ドルー(John M. L. Drew)の言うように、ディケンズのその後の雑誌や新聞に掲載されるシリアスな記事につながるものだと言えるだろう(Drew 88)。

しかし、「何のメモも取らず」に、「我々のやり方で」(200) 監獄の様子を報告するボズは、後のエッセイ等に見られるような、政治的な関心を抱いているわけではない。ボズは「習慣の力」(The force of habit; 199)によっていかに人々がその近くを通っているにもかかわらず、監獄に無関心でいるかということ述べ、以下のように続けている。

Contact with death, even in its least terrible shape, is solemn and appalling. How much more awful is it to reflect on this near vicinity to the dying - to men in full health and vigour, in the flower of youth or the prime of life, with all their faculties, and perceptions as acute and perfect as your own; but dying, nevertheless - dying as surely - with the hand of death imprinted upon them as indelibly - as if mortal disease had wasted their frames to shadows, and corruption had already begun! (200)

このように、ボズの関心は監獄の管理体制や死刑制度の是非といったところまで飛躍するのではなく、あくまで死刑囚の心理に向けられている。そして“corruption had already begun!”という比喩からも窺えるように、ここでボズは迫りくる自分の処刑を意識し、絶えずその恐怖に苛まれる囚人の姿を想像しているように思われる。ニューゲート監獄への関心は「刑事裁判所」(“Criminal Courts”)の中でも語られており、冒頭でボズは子どもの頃ニューゲート監獄を外側から眺めた時の「畏怖と敬意」(194)の念を忘れることはできないと言い、「言葉に言い表せないほどの好奇心」(an indescribable feeling of curiosity; 195)に駆られて監獄の門が開いた隙にその中の様子を垣間見ていたことを述懐している。さらに続けて、“we still retain so much of our original feeling, that to this hour we never pass the building [Newgate] without something like a shudder.” (195)と述べている。1839年に作品集を一冊にまとめた際にこの2篇を並べていることから、両者の関係は明白であろう⁴。このようにボズは少年の頃から抱いていた、怖いもの見たさとも言うべき好奇心に駆られ、日常の光景とはかけ離れた異世界を訪れるつもりでニューゲート監獄に向かっているのである。

しかし、ボズが壁の向こうの異世界としてニューゲート監獄を訪れたとすると、その期待は裏切られることになる。ボズはまず監獄の「事務所」に案内されているが、この部屋はありふれた調度品が備え付けられた、“an ordinary attorney’s office, or a merchant’s counting house”のような部屋であったと記されている。さらに、看守は“a respectable-looking man”で、“looked quite as much like a clergyman as a turnkey” (200)であったとされている。ここでの看守は「刑事裁判所」で描かれる看守の姿とは大きな違いが見られる。「刑事裁判所」では、看守は“an ill-looking fellow in a broad-brimmed hat, Belcher handkerchief and top boots” (195)と描写されていて、非常に粗野で、いかにも囚人たちを虐げる人物といった印象を与える。一方、「ニューゲート監獄訪問」では、看守はトッピー

⁴ 現在の形ではこの2篇は並んでいるが、「刑事裁判所」は1834年10月23日に「オールド・ベイリー」(“The Old Bailey”)という題で『モーニング・クロニクル』(*Morning Chronicle*)誌に掲載されたのが初出である。

一ツさえ履いておらず、そのため自分はがっかりしたと書かれている。このような、ボズの描いていた監獄に関するイメージと実物の違いから、彼の監獄観察は始まるのである。

この看守の事務所のように、外の世界でも見られるような様相を呈する光景は囚人たちの監房の中にも見られる。女囚を収監した監房の一つを観察した際、ボズはそこが“far more light and airy than one could reasonably expect to find in such a situation”であることに気づき、そこにある調度品も“in great order and regularity” (203)な状態で並んでおり、さらに女囚たちも清潔で、上品な格好をしていたことを記している。女囚の中から品行の正しさによって任命された監房長が管理するこの監房は、しっかりと秩序が保たれているのである。この監房の様子は、後に『アメリカ紀行』(*American Notes*)で嫌悪感をもって描かれるニューヨークの監獄の様子と非常に対照的である⁵。ディケンズは後(1839年版)に、この女囚たちの監房について、「こういった囚人たちをめぐる環境は、この作品を書いた頃と比べるとかなり改善された」という趣旨の註を加えている(204)。当然囚人間に上下関係を生むこのシステムには問題があり、そのため後にディケンズは考え直してこの註を挿入したと思われるが、フィリップ・コリンズ(Philip Collins)の言うように、テキストの中からはこのシステムに対するディケンズの批判は窺えない(Collins 34)。このように、この部分だけ読めば監獄の話であることが分からないほどに女囚たちに犯罪者然とした点は見られない。彼女たちに対してボズは“there was nothing peculiar, either in their appearance or demeanour.” (203)と言って、あまり気にすることなく次の監房に向かっている。概してこの監房に関する記述は非常に淡々とした、静かなものだと言えるだろう。

また、監獄が「普通」であることについては、死刑囚たちの様子にも見られる。女囚たちの監房と同様に、彼らの監房も風通しがよく、清潔さが保たれて

⁵ ニューヨークの監獄を訪れたディケンズは、囚人が服を独房の床に投げ散らかしていることに嫌悪感を抱き、“Don’t you oblige the prisoners to be orderly, and put such things away?” (AN, 95)と看守に質問している。

いて陰鬱な様子はない。彼らは既に死刑の宣告を受け、判事の報告を待つみの身であるが、ボズは彼らの顔に“anxiety or mental sufferings” (207)の様子が見られないことを意外に思い、死の宣告が自分の命に対してなされたということを知っている者が彼らの中に一人でもいるのかどうかと疑問に思っている。死刑の宣告を受けた身であるにもかかわらず、彼らの様子は穏やかでさえあると言えるだろう。コリンズによれば、窃盗などの犯罪によって死刑の判決を受けた場合はその判決が覆る可能性が非常に高く (Collins 35)、彼らは自らの運命に対して楽観視しているために落ち着いていると考えられる。結局死刑にならない者に対し死刑判決を次々に下すことは残虐な行為だと言えるが、ここではこういった事情は説明されず、ボズの“*There was nothing remarkable in the appearance of these prisoners.*” (207) というコメントからは、女囚の監房と同様に、この監房も「普通の」様相であったことが分かるだけである。

このようにボズが見かけた囚人たちの「普通の」日常は、実は様々な問題を孕んでいるが、その事情について語られることはない。結果として、これらの場面は“*the recollections of it [the condemned pew] will haunt us, waking and sleeping, for a long time afterwards.*” (206)と語る監獄の礼拝堂の「死刑囚席」についての彼の恐怖に満ちた語りなどとは明らかにトーンが異なる。ディケンズが「死と隣り合わせる」ことの恐怖、そしてそれに追随する監獄に対する恐怖を描こうとしているのであれば、女囚や死刑囚たちの監房の孕む問題を語らずに、彼らの「普通の」様子を強調した描写は不自然なものにさえ思えてくる。その理由として、若いディケンズにとって、たった2時間の観察で監獄の諸問題について見抜くことは困難であったからだとしてコリンズは指摘しているが (Collins 36)、もしディケンズが何らかの意図を持って監獄の「普通の」様子を描いているとすればどうであろうか。「ニューゲート監獄訪問」の中で、ディケンズは見たことすべてを描いているわけではない。例えば監獄のキッチンについての記述をディケンズは省いているが、その理由について彼は『ボズのスケッチ』の発行者であるジョン・マクローン (John Macrone) に対し、“*I know no place*

in which I could introduce the fact without weakening my subsequent description.” (Letters 103)と説明している。「ニューゲート監獄訪問」は完全な創作ではなく、実際に監獄を観察した報告である。しかし、この手紙の内容からは、ディケンズが1つ1つの光景が全体にもたらす効果を考えてこのスケッチを描いていることが窺えるのではないだろうか。そこでこういった囚人たちの「普通の」姿が描かれることによってもたらされる効果について考えることで、本項でのまとめとしたい。

興味深いことに、「ニューゲート監獄訪問」の中では、囚人たちが犯した罪についての説明はほとんどなされていない。監獄を観察している間、ボズには常に看守が付き添っているので、囚人について多少の説明はなされたと予想されるが、ディケンズはあえて看守の話した内容をほとんど書かずに、自分が見た光景のみを描いているのである。このことを囚人たちの「普通の」日常と関連して考えてみると、ディケンズの、囚人を監獄の外の人々と変わらない者たちとして描こうとする試みが見えてくる。ボズが観察している間の女囚たちの“the general feeling”は“seemed to be one of uneasiness” (204)であったと書かれている。このことに関して彼はあまり深く考えていないが、彼女たちの感じているものは、監獄にいる自分を他人に見られることに対する羞恥の念であることは間違いない。当然これは誰でも感じる感情であり、他の場面で描かれている、監獄に入ることに對して無頓着になっている女囚とは異なり、より自分たちに近い存在として読者の目に映るであろう。また、死刑囚たちについても同様のことが言える。彼らの様子を、ボズは次のように淡々と説明している。

One or two decently dressed men were brooding with a dejected air over the fire; several little groups of two or three had been engaged in conversation at the upper end of the room, or in the windows; and the remainder were crowded round a young man seated at a table, who appeared to be engaged in teaching the younger ones to write. (207)

読み書きを習うという光景は当然外の世界の日常でも見られるものであり、何の変哲もない行為である。だからこそボズは大して気にもせず立ち去っているのであるが、ここでも死刑囚たちの罪状が明らかにされないことによって彼らは読者とそれほど変わらない存在であることが示されている。このように囚人が読者に近い形で描かれ、さらに彼らの罪状が明らかにされず、彼らの現状は当然の報いであるという面が取り払われることによって、囚人はより読者が自らを投影しやすい存在になっていると言えるだろう。

しかし、たとえ彼らが監獄の外の人々と変わらない生活を送っており、同様に身体的、肉体的に苦痛を味わうことがないとしても、ここが監獄であり、彼らが自由を奪われた身、特に死刑囚は死を待つみの身であるという事実は変わらない。死刑囚の監房の次にボズが訪れる、また別の3人の死刑囚たちのいる監禁室では、今までの「普通」の囚人たちとは全く異なる様子の方が描かれている。彼ら3人のうち2人は先の死刑囚たちとは異なり、特赦の可能性もない、完全に死刑が確定した囚人である。そのうちの1人の様子は次のように描かれている。

The light fell full upon him, and communicated to his pale, haggard face, and disordered hair, an appearance which, at that distance, was ghastly. . . . his eyes wildly staring before him, he seemed to be unconsciously intent on counting the chinks in the opposite wall. (208)

この死刑囚の“pale, haggard face”や“disordered hair”などからは彼の焦燥や恐怖が見てとれ、壁の割れ目を茫然と数える様子からは狂気さえ感じさせる。この様子は先の死刑囚たちや、あるいはこの監房の中の1人で、まだ恩赦の可能性が残されている囚人の“with a firm military step” (208)で中庭を歩き回る様子とは対照的である。この監禁室を訪れる際、看守はボズに““The two short ones

[prisoners] . . . were dead men’” (207) と言っている。これはこの作品の中で描かれる看守の唯一の言葉であり、その不気味な響きがディケンズに戦慄を感じさせたことは間違いない。前述のように、先ほどの死刑囚たちに恩赦が与えられる可能性が高いことについて触れられていないために、この囚人の姿は彼らの末路として読者の目には映るであろう。そう考えると、彼らを隔てるものは判事の報告が届くまでの数日の差だけである。そのわずかな時間の経過によって、監獄の外の人々と変わらないそれまでの彼らの日常が、確実に死が差し迫る非日常へと急激に転換する恐怖が浮かび上がってくる。

「ニューゲート監獄訪問」は、処刑を前日に控えた死刑囚の心理についてのボズの想像で幕を閉じる。時が“with a speed which no man living would deem possible” (209) で過ぎゆく中、死への恐怖や幸せな頃の思い出、脱獄への虚しい期待などで思考が千々に乱れる様子は、この作品を最初に激賞したジョージ・ホガース(George Hogarth)以降、多くの批評家が指摘しているように、ヴィクトル・ユーゴー(Victor Hugo)の『死刑囚最後の日』(*The Last Day of a Condemned Man*) を思い起こさせるものである。確かに切迫する死への恐怖を描こうとしている点について両作品は共通している。しかし今まで見てきたように、監獄に収監されてから死刑に至るまでの日々を「六週間の苦悶」(ユーゴー, 106) と語り、絶えず死への恐怖に怯えている『死刑囚最後の日』の語り手とは異なり、ディケンズの描くニューゲート監獄には世間とそう変わらない、「普通の」様相を呈した監房や囚人たちが多く描かれている。ディケンズはその恐怖を一边倒に描くのではなく、囚人たちの「普通の」日常と死刑への恐怖の両方を描き、その対比を強調している。そして、ディケンズは読者に自らを「普通の」生活を送る囚人に投影させ、死刑囚の辿る運命を追体験させるような感覚を抱かせることによって、「死と隣り合わせること」の恐怖を効果的に描いているのである。

II

前項で述べた内容を踏まえて、ニューゲート監獄の外の人々について考えてみたい。彼らは囚人が自分たちとは無関係な存在であると信じているからこそ監獄の近くを気にも留めずに通り過ぎている。しかし、彼らと囚人は、実は似通ったものであるということの本項では明らかにしたい。

まずは「通り—朝」(“The Streets —Morning”)に目を向けたい。これは早朝から昼にかけて街頭が次第に賑やかになっていく風景を捉えたスケッチであるが、ロンドンの郊外から仕事場へ向かう者たちの様子は、次のように描かれている。

. . . the early clerk population of Somers and Camden Towns, Islington, and Pentonville, are fast pouring into the city, or directing their steps towards Chancery Lane and the Inns of Court. Middle-aged men, whose salaries have by no means increased in the same proportion as their families, plod steadily along, apparently with no object in view but the counting house; knowing by sight almost everybody they meet or overtake, for they have seen them every morning (Sundays excepted) during the last twenty years, but speaking to no one. . . . Small office lads in large hats, who are made men before they are boys, hurry along in pairs (53)

ここでの“pouring”、“hurry”などの表現から通りが慌ただしく活気づいていく様子が伝わってくるが、彼らは仕事場に向かって急がされているのであって、決して歩くことを楽しんではない。また、彼らは毎日道で行き交う人との交流さえも持とうとしていない。そして変化のない、単調な日常を表すかのように、中年の事務員たちの足取りは“plod”と表現されている。このような仕事によって縛られた人々の歩き方は、興味を引くものを求めて街を散策することを好む

ボズとは全く異なる。確かにこのスケッチは朝の街の賑わいを描いたものであるが、アマンパル・ガーチャ(Amanpal Garcha)の指摘するように、この事務員たちのような、スケジュールに縛られ、楽しみを失って歩くことを強制された者たちの姿が描かれているのである(Garcha 137)。

こういった事務員たちの日常をより細かに描いているものが「人々に関する考察」(“Thoughts about People”)である。ここで描かれている中年の男性は独身で、より孤独な身の上にあると言えるが、「通り—朝」で描かれた事務員の典型と言える人物である。ボズは街で偶然見かけた男に対し、“There was something in the man’s manner and appearance which told us, we fancied, his whole life, or rather his whole day” (213)という感覚を抱き、彼の日常を想像し始める。それは仕事場以外ではほとんど他人と交流することのない、単調で、孤独な毎日である。最後に“Poor, harmless creatures such men are; contented but not happy; broken-spirited and humbled, they may feel no pain, but they never know pleasure.” (214)と締めくくって彼に関する想像は終わっている。

この事務員たちの、「楽しみを決して知ることのない」生活というものについて、より深く考えてみたい。『ボズのスケッチ』の中では事務員たちが味わうことのない楽しみ、すなわち娯楽のことが数多く描かれている。「グリニッジ・フェア」(“Greenwich Fair”)は子どもの頃に出かけた復活祭の日にかかれる縁日について振り返ったものであるが、冒頭でボズはこのお祭りが “a three days’ fever” (112)であると説明し、民家が「簡易食堂に姿を変え」(turned into tea shops; 114)、果物屋が菓子や玩具を陳列する店に早変わりするような、日常が非日常的な情景に一変する楽しさを嬉々として振り返っている。誰もかれもが“anxious to get on, and actuated by the common wish to be at the fair, or in the park, as soon as possible.” (114) といった状態である様子は、「通り—朝」で描かれた、強制されて仕事場へと歩かされる事務員たちとは対照的である。彼らは祭りが終わると“old habits of plodding industry” (112)と表現されている、単調な生活へと戻る。彼らの日常生活そのものは「人々に関する考察」で描かれている事務員と変わ

らないものであろう。しかし、年に一度のことであるにせよ、気晴らしとなる娯楽が与えられることによって、彼らは自由を味わうことができるのである。

しかし、「グリニッジ・フェア」がボズの思い出の中にある情景の描写に終始していることから分かるように、こういった単調な日常を一変させる、娯楽という人々の息抜きは過ぎ去った過去のものとして描かれることが多い。例えば「五月祭」(“First of May”)では、春の到来を祝した人々の踊りや、煙突掃除人たちの仮装行列は“the romance of springtime” (170)であったとされ、「グリニッジ・フェア」同様にその思い出はノスタルジックに描かれている。しかし、煙突掃除人たちは次第に“restless spirit of innovation” (172)にかぶれてしまい、リスペクタビリティを求めた結果、仮装行列の魅力は失われていく。こうした状況を嘆いたボズは、“How has May-day decayed!” (175)とこのスケッチを締めくくっている。

こういった人々の娯楽が徐々に時代の流れによって廃れていくのは、縁日や仮装行列のような年に一度の特別な行事にとどまらない。「スコットランド・ヤード」(“Scotland Yard”)では、ここがかつては石炭人夫たちが昼は忙しく働き、夜は賑やかに酒場で語らう昔ながらの場所であったが、次第に“the advance of civilization” (68)によってこのような光景は失われ、他と変わらない、平凡な場所になってしまったことを嘆いている。このスケッチでは、最後にこの時代の変化に対応できない老人のことが描かれている。

Amidst all this change, and restlessness, and innovation, there remains but one old man, who seems to mourn the downfall of this ancient place. He holds no converse with human kind, . . . watches in silence the gambols of his sleek and well-fed dogs. He is the presiding genius of Scotland-yard. . . . Misery and want are depicted in his countenance; his form is bent by age, his head is grey with length of trial, but there he sits from day to day, brooding over the

ここで描かれる「人と言葉を交わすことなく」、ただ犬を眺めているだけの老人は“presiding genius of Scotland Yard”と形容されているが、他者との交流が失われていくロンドンの社会全体を象徴する姿だと言えるだろう。『ボズのスケッチ』の中には「発展」、「改良」などの言葉が随所に見られ、発展の最中にあるロンドンの様子が描かれている。しかし、一方でそういった発展に伴う社会の画一化の流れの中で、単調な日常に息抜きを与えてくれるような娯楽や、他者と心を通い合わせることができるような空間が失われていったことに関することも、このスケッチ集の中では数多く描かれているのである。楽しみもなく、発展へと推進する社会の歯車の1つとして単調な日々を繰り返す彼らは、自由を奪われたニューゲート監獄の囚人同様に、拘束された状態にあると言えよう。

しかし、囚人たちとは異なり、「人々に関する考察」で描かれた事務員のような中産階級の人々は、「楽しみ」はないが、彼らの単調な生活にはその代償としての安定があることは間違いない。だからこそ彼らは幸せではないが、「満足して」おり、「苦痛」も感じないのである。しかし、彼らの安定は、それほど確固としたものなのだろうか。

『ボズのスケッチ』では、中産階級から零落し、惨めな窮状に陥る人々が多く登場する。「我が隣人」(“Our Next-door Neighbour”)では、ロンドンに仕事を求めてやってきた青年とその母親が描かれているが、「人々に関する考察」にも“Urged by imperative necessity in the first instance, they have returned to London in search of employment” (211)という記述があることから考えると、この母子もまたロンドンの典型的な新しい住人だと言えるだろう。しかし、生活のため懸命に働いた若者は間もなく過労死してしまう。最後に彼は母親に告げる言葉は次のように告げて息を引き取る。

‘Mother! dear, dear mother, bury me in the open fields – anywhere but in these dreadful streets. I should like to be where you can see my grave, but not in these close crowded streets; they have killed me; kiss me again, mother; put your arm round my neck – ’ (47)

ここで注目すべきは、最後の“they [these close crowded streets] have killed me”のところである。「通り——朝」で描かれたような、毎日人々が「なだれ込んで」仕事場へと向かうその流れからいったん脱落してしまうと、その行く先は死のみであることを示す痛切な一言だと言えよう。この作品のタイトルが「我らが隣人」であることも示唆的であり、こういった悲劇的な死は特別珍しいものではなく、自分たちの周り、あるいは自身にも起こりうることだということが示されているのである。

中産階級からの零落というパターンは、「我らが隣人」のようにその最終的な末路としての死まで描かれることがなくとも、確実にそれを予想させるように描かれている。「斜陽の人々」(“Shabby-genteel People”)に出てくる男が服の色落ちやほつれを色揚げ剤(reviver; 263)でごまかそうとしても決して本質的には自らを revive させることができないのと同じように、一度安定した身の上から転落してしまうと、二度と持ち直すことはできない。

「質屋」(“The Pawnbroker’s Shop”)はそういった中産階級の転落の過程が段階的に描かれた作品である。質屋を訪れたボズは、窮乏のため大事にしていた金の鎖と「忘れ形見」の指輪を手放す母娘、明らかに娼婦と思しきけばけばしい服装の女性、そして “the lowest of the low” (192)と表現されている、墮落しきった汚らしい女性を見かける。三者三様に貧しさがもたらす不幸な有様が窺えるが、アリスン・バイヤリー(Alison Byerly)の言うように、ボズはこの光景をウィリアム・ホガース(William Hogarth)の連続画を思わせる(Byerly 356)、中産階級から転落した女性の辿る“progress”として捉えている。

Who shall say how soon these women may change places? The last has but two more stages - the hospital and the grave. How many females situated as her two companions are, and as she may have been once, have terminated the same wretched course, in the same wretched manner! One is already tracing her footsteps with frightful rapidity. How soon may the other follow her example! How many have done the same! (192-3)

ここでボズの想像は、3人の質屋の客から社会全体の女性にまで広がっているが、同様に「囚人馬車」や「モンマス通りでの瞑想」(“Meditations in Monmouth Street”)でも没落の“progress”が描かれ、そういった零落がいかに日常的に起こっているかということが強調されている。この2つの作品で描かれているのは貧困の果てに犯罪に走った者たちであるが、彼らもまた発展する大都市の歯車から脱落した者たちであることは変わらない。このように、ディケンズは中産階級からの零落がいかに日常的なものであり、かつ誰にでも起こりうるものだということを繰り返し描いているのである。F. S. シュウオーツバック(F. S. Shwartzbach)は、『ボズのスケッチ』においては靴墨工場でのトラウマの影響はほとんど見られないと述べている(Shwartzbach 40)。確かに「セヴン・ダイヤルズ」(“Seven Dials”)ではウォレン靴墨工場のことの冗談めかして触れられており、後の作品に比べると明るい調子でかつての屈辱に触れられているようにも見える。しかし、身分の急激な転落から死までの流れが何度も繰り返して出てくることを考えると、やはり中産階級から社会の最下層への急激な転落を身をもって体験したディケンズ自身の恐怖体験が作品の中に反映されていると考えるべきであろう。

このように、「通り—朝」や「人々に関する考察」で描かれる事務員のような中産階級の人々の、一見波風の立たない「安定」した生活は、常に転落、あるいはその末路としての死の危険と隣合わせであることが見えてくる。しかし、

このような環境にありながら、彼らはニューゲート監獄に対し無関心であるのと同様に、零落した人々を驚くほど気にかけていない。例えば「通り——夜」(“The Streets —Night”)では通行人から日銭を得るために民謡を歌う、貧困のためにやつれ果てた女性が登場するが、寒さと飢えによる死が待っているだけの彼女に同情的なボズに対し、道行く人々が彼女に与えるものは「無情な嘲笑」(A brutal laugh; 58) だけである。彼女がもともとは自分たちと同じ境遇にあったかもしれないと思い、彼女の姿を自分たちの将来の姿に重ね合わせる者は誰もいない。しかし、アンガス・ウィルソン(Angus Wilson) の言葉を借りれば、「いつ何どき最後の眠りの静止状態に帰するか分からない世界」(Wilson 88)に彼らが生きている以上、今は平穏な生活を送っていても、世間の片隅で繰り返される不幸がその身に突然降りかかってもおかしくはない。ニューゲート監獄の死刑を宣告された囚人たちが、自分や周りの者たちの迫りつつある死に対して無関心な様子で、死を控えた身とは思えない「普通の」様子を見せていたことは前章で述べた通りであるが、このように他の作品で描かれる世間の人々の方も、たとえ監獄とはかけ離れた生活を送っているように見えても、実はその平穏な生活は薄氷の上に成り立つ、いつ零落してもおかしくはない状況にあるという意味において、囚人と似た状態にあるのである。

結び

『ボズのスケッチ』の副題は「日常生活と、日常の人々を描いたもの」(*Illustrative of Everyday Life and Everyday People*)というものであるが、ニューゲート監獄という、世間から切り離された場所を舞台にしているという点において、「ニューゲート監獄訪問」だけが「日常ならざる」人々に関するスケッチだと言えるだろう。マイケル・ホリントン(Michael Hollington)は、『ボズのスケッチ』の中の作品群は、「近代の都市生活における恐怖の平凡化(banalization of horror in modern city life) を読者に伝え、彼らに見る力(power of vision)を取り戻させること」(Hollington 163)を追求していると述べているが、ホリントンの

言う「恐怖の平凡化」は「近代の都市生活」における話であるので、「日常ならざる」ニューゲート監獄の恐怖は、彼の指摘の埒外にあるようにも思われる。しかし、今まで見てきたように、この作品集の中で描かれる人々の暮らしは、囚人の送る生活と似通ったものである。つまり、監獄は市井に生きる人々の生活がより凝縮された世界なのであり、そういった意味において、「ニューゲート監獄訪問」は『ボズのスケッチ』の中の集大成的な作品なのである。

引用文献

- Byerly, Alison. "Effortless Art: The Sketch in Nineteenth-Century Painting and Literature." *Criticism* 41.3 (1999): 349-64.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: Macmillan, 1965.
- DeVries, Duane. *Dickens's Apprentice Years: The Making of a Novelist*. New York: Harvester Press, 1976.
- Dickens, Charles. *American Notes*. London. Penguin Books, 200.
- . *Dickens's Journalism: Sketches by Boz and Other Early Papers 1833-39*. London: J. M. Dent, 1994.
- . *Dickens's Journalism: The Uncommercial Traveller and Other Papers 1859-70*. London: J. M. Dent, 2000.
- . *The Letters of Charles Dickens* vol. 1. Madeline House & Graham Storey, eds. Oxford: Clarendon Press, 1965-2002.
- Drew, M. L. John. *Charles Dickens' "Uncommercial Traveller" Papers (1860-69): Roots, Interpretation and Context*. Diss. U of London, 1994.
- Garcha, Amanpal. *From Sketch to Novel: The Development of Victorian Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Hollington, Michael. "Boz's Gothic Gargoyles." *Dickens Quarterly* 16.3 (1999): 160-77.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. London: Hodder and Stoughton, 1988.
- Shwarzbach, F. S. *Dickens and the City*. London: The Athlone Press, 1979.

Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009.

———. Introduction. *Dickens' Journalism: Sketches by Boz and Other Early Papers 1933-39*. London: J. M. Dent, 1994.

Willis, Nathaniel P. *Dashes at Life with a Free Pencil*. New York: Burgess Stringer Co, 1845.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.

ユーゴー (ヴィクトル) 著. 『死刑囚最後の日』 豊島与志雄訳. 岩波書店, 2010.

出典 : *Zephyr*、第 24 号、京都大学大学院英文学研究会、2011 年、35-55.